

合をおこない、戦没者と物故者の冥福を祈りつづけていく。

## ソ満国境警備体験記

山梨県 末木定弘

昭和十五年一月十日現役兵として東京都世田谷野砲兵東部十三部隊に入隊した。翌日から注射の毎日である。二四時間安静の四種混合注射を受けた。一月十八日外地派遣のため、品川駅を出発（行先不明）。途中、静岡市の大火の残煙を車窓よりみる。

下関―門司（一泊）、釜山―満鉄と進み、一月二十三日頃満州国黒河省孫吳到着。ここでほとんどの同年兵が下車した。満州第五一四部隊本隊の所在地であった。

同年兵と分かれ、我々は長い時間列車に缶づめにされ、さらに北の黒河省黒河駅で下車した。夜半である。はじめて大陸のきびしい寒さに接し身ぶるいした。

迎えのトラックに便乗、回国最北端の法別拉陣地（環

環県）に到着した。一月二十四日未明、一行百五十人ぐらいだったと思う、バラックのような木造兵舎にはいり二、三年兵を迎えられた。夜明けと共にあたりは一面銀世界の山岳地帯となった。点々と淋しく白樺の木がある。

満州第五百十四部隊派遣法別拉陣地第二中隊斎藤隊であった。

各班に配属され一日はゆっくり休むことが出来たが、翌日からはきびしい軍隊生活が始まった。観測、通信、砲手、馭者と配分され、小生は通信であった。

日ならずして二、三年兵の怒号が各班でおきた。気がゆるんでいるというビンタの私的制裁である。

二年兵の戦友を一人受け持ち先輩のすべての面倒をみた。順番のことで初年兵の役目であった。枕等よごれていると金魚の絵と水がほしいと赤いチョークで書かれ、洗濯せよとの意味であった。百メートルもはなれたくぼ地の水のたまりで氷を割っての洗濯、そとは零下三十度の寒さ、耳も手もちぎれる寒さであった。

通信兵として毎日教育を受け、手旗信号から観測野砲

間の通信連絡を想定しての有線敷設訓練、背中に電話線を負つての駆足である。体の小さい小生、くわえて防寒装備着用の行動には苦勞した。

午前の教育が終わり隊へ帰るとコーリヤン飯の昼食。

食べ終わるまもなく午後の集合である。一日の教育が終わり夕食、点呼、消灯だが、その間には戦友の軍衣類のつくろい、ネームいれ、おかげで針仕事もすこしは出来るようになった。

不寝番もまわってきた。ペーチカに薪を投入しながら各班を巡回する不寝番の勤務は三時間の長い勤務である。

厳しい寒さとたたかしながら初年兵教育を受ける毎日である。ピントも数十回は受けたろう。目から火が出る、そんな感じもあった。

陣地は黒龍江をはさんで対岸は眼下に広がるソ連領、こちらは山岳陣地に壕を掘った有利な地形と記憶している。

やがて十五年も十二月となりよいよ来月（十六年一月）は初年兵を迎える。到着を一日千秋の思いで待つて

いた。ところが年も明けた一月何日頃だったか、本隊である孫呉の五一四部隊に復帰となり、苦勞を共にした同年兵を数十人残し、うしろ髪を引かれる思いで陣地を去った。

孫呉は四方が低い山の盆地で第一師団があり、各兵科が集結する大部隊の所在地である。第一師団長は横山勇中将、五一四部隊長は池田金也大佐、のちに熊川到長大佐であった。兵舎等は法別拉陣地の比ではなく広大な敷地にレンガづくりの各中隊兵舎、連隊本部、士官・下士官集会所、炊事、酒保に数十棟の厩舎が建っている。広い盆地のためか寒さは陣地よりきびしい。

十六年一月末、待望の初年兵が来た。食事当番もない、掃除もない、身のまわりのことも初年兵がやってくれる、一年間の苦勞も思い出となりよろこびにかわった。

しかし中隊には数百頭の馬がいて、朝夕の食事前には馬の運動、手入れ、飼葉である。陣地ではほとんど経験したことのないことだった。馬運動は一頭は乗馬、左右に別の馬を連れての一人三頭の運動である。雪は降る、吐く息は白く、まつ毛は凍る。人馬共同様である。

初年兵の教育も次第に進み十六年七月を迎えたころ、関連軍特別演習のもとに予備役召集兵が入隊してきた。初年兵に注意すると予備役兵から、逆に注意され、時には制裁を受けた。なんと我々は不運なめぐりあわせかながいても致し方なかったわけである。

真珠湾攻撃があり孫呉も風雲急を告げ、あわただしい出陣にそなえての訓練は、毎日きびしくつづいた。

昭和十七年春一月がおとづれ、三年兵は去り、再度初年兵を迎えた。一月下旬から二月上旬にかけて冬季実弾大演習がおこなわれ、野営をして五、六日間だった。雪のなか、昼夜通しての行軍もあり疲労と不眠で隊後に落ちる者、ひどい凍傷で運ばれる者が続出して筆舌につくしがたい苦痛であった。

最も寒さのきびしい時期で、おそらく明け六つ（午前六時）前後は零下五十度くらいの日もあったろう。今なお忘れたい苦しかった思い出がある。南方では戦闘が次第に不利になっていた。生命の危険こそない国境警備であったが、よくも雪と氷、きびしい寒さ、軍律にたえてご奉公したと自負している。

時は流れ十八年四月、内地勤務を命ぜられ、同月十四日、原隊東部十三部隊に転属、十六日現役満期除隊した。

## 鉄道連隊従軍記

愛知県 渡会 美尾次

昭和十六年六月赤紙がついに来る。千葉県津田沼町鉄道第二連隊へ入隊。この年は雨が多く、今生の分かれになるかも知れぬと武運長久祈願のため、豊川稲荷と一宮砥賀神社へかける。黒川の中田付近は水で通れない状態であり、入隊途中の河川に流木や家屋流失など、その惨状は目をおおうものがあつたが、つつがなく入隊することが出来た。

十日ほどの宮内生活のちに出動命令がくだり列車の人となる。しかし、どこへ行くのか、鎧戸をしめたままなので外部との接触も出来ず不安であった。豊橋通過の際、出動の件を葉書で家庭へ知らせた。

列車は神戸へ着く。雨のなか、港で積荷作業を終了し、